

第31回日本受精着床学会

2013.08.08-09 大分

余剰多核胚の染色体正常を array Comparative Genomic Hybridization により確認後、同一周期の多核胚由来単一胚盤胞移植にて妊娠成立した 1 症例

中岡義晴、中野達也、赤松芳恵、前沢忠志、大西洋子、姫野隆雄、井上朋子、伊藤啓二郎、森本義晴

【目的】多核の存在する割球を含む多核胚は、染色体異常の頻度が高く妊娠率が低いいため移植から除外されている。今回、多核胚であった余剰 Day2 胚由来胚盤胞の染色体分析を array Comparative Genomic Hybridization (aCGH)で行い正常であることを確認したため、同一周期で得られた融解後の多核胚を胚盤胞に発育させ、単一胚移植にて妊娠成立した 1 症例を経験したので報告する。

【症例】40 歳、2 経妊 1 経産 1 流産。子宮卵管造影検査にて右卵管水腫と診断され、体外受精目的にて当院受診している。1 回目は GnRH アゴニスト Long 法にて卵巣刺激し、一般体外受精による受精卵を胚盤胞にまで発育させ 3 個を凍結した。3 回の単一胚盤胞移植を実施し、1 回の妊娠は流産（胎児染色体：15 トリソミー）となった。2 回目は一般体外受精で採卵数 12 個すべてに受精を確認できず、3 回目は ICSI にて 6 個受精したが良好胚盤胞にならず移植できなかった。

4 回目は全胚凍結を予定し、GnRH アゴニスト Long 法により 18 個採卵、ICSI 実施翌日 2 前核 (PN) を確認できた 6 個を凍結した。一方、2PN を確認できなかった卵子のうち Day2 で分割した 6 個がすべて多核胚であったため、研究使用に同意を得た後、追加培養で胚盤胞に発育した 3 個のうちの 2 個を aCGH による染色体分析を行い、2 個とも正常であることが確認された。

ホルモン補充周期下凍結胚移植のために融解した凍結 PN 胚 6 個すべてに Day2 で多核胚を認めたが、インフォームドコンセントのもと胚盤胞となった胚を移植することとした。Day6 で胚盤胞となった 1 個を移植し、妊娠が成立し現在も継続中である。

【結論】多核胚の染色体分析で正常胚を確認後に、多核胚由来胚盤胞移植により流産なく妊娠継続している 1 症例を経験した。今後は、さらに多くの多核胚の染色体分析を行い、多核胚の取り扱いを決めたいと考えている。